

刊行当時の海外の書評より――

◆気をつけて！ エーコは決して楽しく面白いだけのエンターテインメントを書いたのではない。本書は実に怖ろしい物語なのだ。
――ワシントン・ポスト

◆偉大な文学に相応しい傲慢なほど挑発的な精神の復活ともいうべき小説。
――エル・クルトゥラル

◆ハイレベルなフーダニット小説――カーカス・レビュー

◆近年のエーコ作品中のベスト――ハフィントンポスト

◆銜学的かつ通俗的、悪意と情熱を兼ねそなえ……古典として残るべくして生まれた一冊――レブプブリカ

◆実に魅力的で軽やかで……さすが達人の技――パブリシャーズ・ウィークリー



著者紹介

ウンベルト・エーコ Umberto Eco

1932年、北イタリア、アレッサンドリア生まれ。記号論学者、評論家、哲学者、文学者、作家。トリノ大学で中世美学、トマス・アクィナスを研究。卒業後、イタリア放送協会（RAI）の文化番組や出版社ボンピアーニ社の評論部門に関わる。ミラーノ大学、フィレンツェ大学等を経て、ボローニャ大学の記号論の教授に就任。同大学名誉教授。2016年2月没。

主な著書：評論『開かれた作品』、『記号論』、小説『薔薇の名前』、『フーコーの振り子』他多数。

訳者紹介

橋本勝雄 Katsuo Hashimoto

1967年生まれ。京都大学文学部卒業。同大学院博士後期課程単位取得退学。現在、京都外国語大学教授。

訳書：ジュゼッペ・パトータ『イタリア語の起源――歴史文法入門』、シモーナ・コラリーツィ『イタリア20世紀史――熱狂と恐怖と希望の100年』、ディエゴ・マラーニ『通訳』等がある。

待望の文庫化！ 8月31日発売

Il cimitero di Praga

Umberto Eco



プラハの墓地

ウンベルト・エーコ 橋本勝雄訳

解説＝仲俣暁生

【創元ライブラリ】ISBN 978-4-488-07094-6 定価2310円（本体2100円）

世界的大ベストセラー『薔薇の名前』の著者である
知の巨人ウンベルト・エーコが描く憎しみと差別のメカニズム！

著者のコレクションによる挿画多数収録。

お問い合わせ

東京創元社営業部 TEL 03-3268-8231 FAX 03-3268-8230
〒162-0814 東京都新宿区新小川町1-5 <http://www.tsogen.co.jp>

ある文書偽造家の物語

ユダヤ人嫌いの祖父に育てられ、法学を学んだ青年、稀代の美食家シモーネ・シモニーニは、祖父の死後、ある公証人のもとで遺言書等の文書偽造の仕事をまかされるようになる。イタリア統一からバリ・コミュン、そしてドレフュス事件等々、陰謀渦巻く混沌とした19世紀ヨーロッパを舞台に、その偽造術を買われた彼は、各国の秘密情報部との接点を持つようになり、その守備範囲は遺言書や証明書などの、個人的な書類から政治的な文書へと広がっていく。そして、行き着いたのは史上最悪の偽書『シオン賢者の議定書』だった。

捏造であることが判明した後も、ナチのホロコーストの根拠とされ、アラブ世界ではいまだに読まれつづけているというこの文書の陰に、このシモーネ・シモニーニの存在が……。

*本書中、シモーネ・シモニーニ以外のほとんどすべての登場人物は実在の人物である。

19世紀のバリ、モベール広場近く、袋小路の突き当たりにある高級骨董売買を謳う一軒の古道具屋。
その店の二階、わずかな光が差し込む窓の前に置かれたテーブルに向かい、部屋着を身にまとったひとりの老人が何かを書きだそうとしている。
私たちはこれからそれを読んでいくことになる……。

プロカンタージュ・ド・カリナ

シモーネ・シモニーニという男

父親はイタリア人、母親はフランス人。ユダヤ人嫌いの祖父に育てられる。「奴らはとびきりの無神論者だ。奴らがまっさきに考えるのは、幸福はあの世じゃなくこの世で実現するべきだということだ。だからこの世界を征服することだけを考えて行動するんだ」それが祖父の教えだった。

◆彼が情熱を感じるものは？

美食。《トゥール・ダルジャン》の名を口にただけで、全身に震えが走る。私を満足させるのは、つねに性より料理だった。

主菜はどうか、仔鴨のルーアン風、ズアオホオジロのカナッペ、そしてアントルメとして茄子のスペイン風、茹でたアスパラガス、王女のカソレット……ワインは何を飲もう。おそらくシャトー・マルゴーかシャトー・ラトゥールそれともシャトー・ラフィット、収穫年しだいだ。

◆彼が憎んでいるのは？

イタリア人は信用できない嘘つきで、卑怯な裏切り者だ。交渉事ではしつこく、風向きしだいで立場を変える。

フランス人は悪人だ。怠け者で、恨みがましく、嫉妬深い。退屈しのぎに人殺しをする。世界中がフランス語を話すと思ひ込んでいる。

ドイツ人は平均してフランス人の二倍の糞をひり出す。ドイツ人を相手にするのは女を相手にするようなもので、いつまでも結論にたどり着かない。ドイツ語はフランス語のように明解ではなく、表現すべきことをけっして正確に表現しない。そのため、ドイツ人はみな自分の言いたいことを理解できず、そのあやふやさを奥深さだと思ひ込む。

ユダヤ人はスペイン人のように無知蒙昧、レバント人のように強欲で、イギリス人のように不潔で、プロイセン人のように傲慢……。

「我憎む、ゆえに我あり」



◆文書を偽造する仕事

「はっきりさせておこう」師匠である公証人は語った。「私は偽文書を作っているわけじゃない。元来あった文書がなくなったり、あつてしかるべきなのにたまたま書かれていなかった場合に、その新しい写しをつくっているのだ」と……。そして「私はいつもお客を信頼しているんだ。紳士方としか取引しないのだから……客が嘘をつくかもしれないなんて考えていたら、この商売はやつてられない」

公証人は、完全に合法とは言えないその活動が当局に知られた場合の用心として公安当局のためにも働いていたのだった。

そしてシモニーニはすぐに師匠を追い越し、筆跡偽造の見事な能力を発揮するようになる。

史実について (ウンベルト・エーコ/本書中「博学ぶった無用な説明」より)

この物語で唯一架空の人物は主人公シモーネ・シモニーニである——それに対して、彼の祖父であるカピタン・シモニーニは架空の人物ではない。ただし歴史上、バリュエル神父に送られた書簡の謎めいた書き手として知られているにすぎない。

それ以外の登場人物はすべて現実存在し、この小説に描かれたような言動をしている(公証人レバウデンゴやニヌツツォのような脇役は別にして)。実名の人物である場合はもちろん(多くの人が嘘だと思ふかもしれないが、レオ・タクシルのような人物も実在した)、架空の名前を持つ登場人物であっても、物語の都合上(実際には)二人の人物が現実に行なった言動を(架空の)ひとりの人物のものとして描いたにすぎない。

しかしよく考えてみれば、シモーネ・シモニーニも、異なる何人かの人間が現実に行なったことをまとめている以上、コラーージュの産物としてではあるが、ある意味で存在したと言える。むしろ、実際には、今でも我々のあいだに存在している。

………
*実名(あるいは、ごくわずかに変えた名)で登場する実在の人物たち

ガリバルディ、ゲトシェ、シャルコー、ゾラ、タクシル、デュマ、ドーデ、ドレフュス、バリュエル神父、フロイト、ジョリ、ラチコフスキー等々……。



◆『シオン賢者の議定書』とは？

ユダヤ教のラビたちが世界征服を計画したとする会話体の文書で、ユダヤ人を陥れるために捏造された文書。史上最悪の偽書と言われる。

自動車王ヘンリー・フォードは自分の所有する新聞で連載紹介し、その後書籍として出版。同書は大ベストセラーとなり、15か国以上で翻訳出版された。

1921年に、タイムズ紙により捏造であることが報道され、抗議や訴訟を受けたフォードは書籍の内容を否定し回収するに至った。

にもかかわらず、ドイツでは、反ユダヤ主義運動に利用され、ヒトラーは『わが闘争』中でこの文書にふれ、ホロコーストを実施するよりどころとしたのだった。現在でもアラブ諸国では読まれつづけているという。

